EDO-TOKYO MUSEUM 江戸東京博物館

えど友

EDO-TOMO

No.56
2010
（平成 22 年）
7 － 8

えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

江戸東京博物館友の会会報

目次

平成 22 年度　定期総会開催 ……1
竹内館長記念講演「相撲の歴史と文化」 ……2
友の会セミナー「徳川家の婚姻政策（前編）」 ……3
友の会セミナー「江戸の食べ物」 ……4
友の会セミナー「江戸の弁才船(菱垣廻船、樽廻船など)」 …5
特別観覧会「2010 年 NHK 大河ドラマ　龍馬伝」 ……6
江戸博クリップ「変わった風景」 ……6
えど友サークルだより / 会議・会合日誌 ……7
楽しもう！　友の会創立 10 周年記念事業 ……8
えど友プラザ「新選組を脱走した隊士」 ……9
「私の秘蔵品―龍馬の書」 ……9
落語で江戸散歩…⑮［三方一両損］ ……10
催事案内 ……11
会員優待のお知らせ ……12

平成 22 年度　定期総会開催
創立 10 周年の節目の年を迎える「友の会」

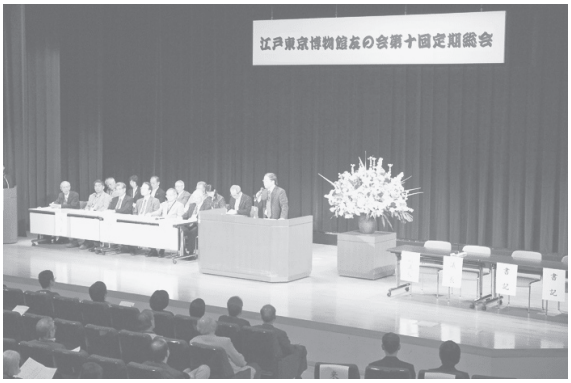
江戸東京博物館友の会の平成 22 年度定期総会は、5 月 28 日(金)午後 0 時 45 分から、江戸博 1 階ホールにおいて開催されました。

司会の柏木静さんの進行により、松原良会長のあいさつ、ご来賓の江戸博・小林淳一副館長、川田明良参事、および鈴木緑管理課長のご紹介、つづいて小林副館長のご祝辞をいただいた後、議長団を選出し議事に入りました。

議長団として、議長に山本隆さん（事業部会）、副議長に内田勝元さん（同）、書記に中村貞子さん（広報部会）と内匠屋（たくみや）京子さん（総務・広報部会）が選出されました。

はじめに議長より、議決権行使書提出者 1,026 名で規定数（3 月末会員数 1,595 名の過半数 798 名）を満たしており、総会が成立している旨の報告がありました（この時点での出席数は 145 名、最終的には 228 名でした）。上程された議案は次のとおりでした。

第 1 号議案：平成 21 年度事業報告並びに収支決算報告（監査報告を含む）
第 2 号議案：平成 22 年度事業計画並びに事業予算
第 3 号議案：江戸東京博物館友の会規約の改正について



第 1 号、第 2 号議案については、会計関係の質問が若干ありましたが、上程された議案は満場一致で提案どおり承認されました。本年度は特に、友の会創立 10 周年を迎えますので、その記念事業について概要が説明され、出席者の関心を集めたようです。前年度に引き続き「会員が自ら参加し、創造していく」という基本方針が再確認されたのが大変印象深かったと感じました。また、第 3 号議案の友の会規約の改正につきましては、松原会長より改正の 4 ポイントが説明され、特に質問等もなく提案どおり承認されました。

定期総会は 2 時 15 分にとどこおりなく終了、15 分の休憩の後、江戸東京博物館・竹内誠館長による記念講演「相撲の歴史と文化」がありました（講演要旨は 2 頁参照）。

その後、4 時 30 分からは、「フィンズ　カフェ＆レストラン」の 2 階で懇親会が開かれ、約 120 名の会員が懇親の輪をひろめ、なごやかなひとときを過ごしました。約 1 時間で散会となりましたが、参加者は総会の壇上を飾った豪華な花の 1 本をそれぞれ手にしながら会場を去っていきました。1 年後の再会を約しながら……。

【取材】文：広報部会・福島信一
写真：同・岡田守弘

江戸東京博物館友の会創立10周年記念・国際博物館の日記念講演
（2010/5/28）

「相撲の歴史と文化」

江戸東京博物館　　竹内　誠　館長

相撲の起こり

相撲の原型とも言うべき姿を、古事記や日本書紀に記された神話や伝承に見ることができます。もちろん神話や伝承は史実ではありません。しかし太古の人びとのものの考え方を読みとることができると思います。

例えば、古事記の中の「出雲の国譲り」の神話に二人の神様が力くらべをし、勝った神様の方に国が譲られたとあります。領土の帰属という重大事を血を流すことなく力くらべによって神の意思を聞いているのです。相撲の起こりは、このように大事なことを決める際、あるいは天下泰平・五穀豊穣を祈る際、神に相撲を奉納することにあったと思われます。

奈良・平安時代には全国から力自慢が召集されて「相撲節会」(天覧相撲)が開かれています。鎌倉・室町時代には武術としての相撲、余興としての相撲、神事としての相撲というように広がりを見せます。

近世・江戸時代の相撲

江戸時代に入ると五穀豊穣祈願や寺社建立資金集めのための勧進相撲が興行として行われるようになります。また強い力士は大名のお抱えになったので、礼節を重んじる武士身分として社会的地位はしっかりとしたものでした。

五代将軍綱吉の治世には円形土俵や四本柱が設けられ、土俵は神聖なる場であるという概念・思想が明確になってきます。四本柱は聖と俗との境を仕切る結界としての役割を意味しています。

同時に土俵ができたことによって相撲の技が進歩発展します。土俵がない時代は相手を倒して土をつけるのが勝ちでしたから、投げ・掛け・捻り・反りの四つが基本技でしたが、土俵ができてからは、押し・寄り・突きが基本技に加わりました。

宝暦7(1757)年には、江戸相撲の番付表が横2枚（東・西）から縦1枚番付表(現在と同じ)になりました。これは、いろいろなものを簡単に比較できるということで数多くの「見立番付」(名所番付、金持番付、銘菓番付など数千種）が出回り、相撲発信の文化が時代を動かしたのです。また、明和2(1765)年には、錦絵が誕生し、人気力士の「相撲絵」が一世を風靡(ふうび)しました。谷風・小野川・雷電などの名力士が活躍した天明・寛政期は、相撲のまさに第1期黄金時代で、三大娯楽(吉原、芝居、相撲）の一角を占めていたのです。

大改革、全天候型国技館の完成

第2期黄金時代は常陸山・梅ケ谷が活躍した時代で、明治42(1909)年、両国の回向院脇に全天候型国技館が完成しました。それまでは、野外なので晴天10日間という興行でした。このときに、最高位が横綱になり、関取の場所入りは羽織・袴着用などが決められました。

第3期黄金時代の前提として、昭和3(1928)年からラジオ放送が始まりました。放送時間の関係で仕切り制限時間や仕切り線も決められました。この時期有名な力士は69連勝の双葉山です。私が相撲という世界にはまった時期でした。

第4期黄金時代は戦後の1950年以降になりますが、いろいろな改革がありました。これはテレビ放送が始まったためで、カメラの邪魔になる4本柱の撤廃、年6場所、15日間興行、制限時間の短縮、ビデオ判定の取入れなどです。このころの花形力士は栃錦と若乃花（初代）でした。このあと昭和60(1985)年に現在の国技館が完成。そして、第5期の花形は誰だったかをいま思えば、やはり若貴兄弟だったでしょう。

今日的な改革の必要性

最近相撲界の不祥事が続いています。昨今も暴力団との癒着まがいのことがメディアを騒がせていてきわめて残念に思います。相撲を地方巡業でつつがなく興行するには地回りとのかかわりが生じます。だから個々の親方に任せるのでなく協会が直接主催するようにシステム改革を一旦はしたのですが、うまく行きませんでした。

相撲の歴史を振り返るとき、それは必死になって伝統を守りながら、創造もしてきた歴史そのものです。とくに明治ではすべての日本人が欧米人化していく中で「相変わらず裸でチョンマゲやってるから不平等条約を押し付けられるのだ」と相撲は批判されましたが、着物とチョンマゲ姿は変えなかったのです。そうした歴史があったからこそ今日、江戸文化を見ながら真剣勝負のスポーツを楽しむことができるのは相撲をおいて他にはないのです。

日本文化としてのスポーツだと確信しながら引き続き改革と創造を進めていくことを期待しています。

【記録】文：広報部会・鈴木進一
写真：同・岡田守弘

第91回 江戸東京博物館友の会セミナー（2010・3・27）

「徳川家の婚姻政策（前編）」

講師　山本博文さん
（東京大学史料編纂所教授・文学博士）

政略結婚の時代

初代家康の妻築山殿は今川義元の養女といわれています。人質であった家康をひきよせるために重臣の娘を嫁がせたという結婚です。２番目の妻の朝日姫は豊臣秀吉の妹でした。天正14(1586)年、秀吉が家康をどうしても自分の麾下（きか）に迎えたいということで、離婚させ、正室として送り込み、家康は上洛し臣従することになりました。

この時代の大名領主の結婚は政略結婚で、結婚という形で人質を取り交わしたのです。

長女亀姫は、対武田勝頼対策として長篠城主奥平信昌に、二女督姫は北条氏直に嫁がせ、関東に勢力のある北条氏との関係を強めようとしました。後に池田輝政に再嫁しています。三女振姫は会津城主蒲生秀行に嫁いでいます。家康は秀行の後見役として東北への勢力拡大へと力をふるいました。秀行が死んだ後浅野長晟に再嫁しています。五女市姫は伊達忠宗と婚約しています。

家康が東三河の小豪族から力ある戦国大名へと勢力の拡大に伴いどの大名と連携したかったかという時代的変遷がよく分かります。しかしながら、娘にはかぎりがあります。まだ関係をつけたい大名がある場合、一門や譜代の家臣の娘を養女として嫁がせています。実の娘と同じ扱いを受け、婚家の大名と徳川家とのつながりを強めていきました（福島・津軽・蜂須賀・堀・有馬・黒田・加藤・山内）。

当時の戦国大名の娘たちは、財産・戦力であって、生きている限り再婚させるなど血縁財産として利用されています。この功利的な考え方は、東三河の小豪族から苦労して大大名へと発展させていく中、家を守るためには何を犠牲にしてもかまわないという考え方を持ったものと考えられます。

娘達が年を取ると、息子秀忠の娘達を政略結婚に利用し始めました。長女千姫は秀頼と７歳で結婚、関が原の戦いの後の不安定な中、豊臣恩顧の大名に豊臣家の安泰と徳川家からの人質という安心感で、政権を安定させた政略結婚でした。次女珠姫は前田利常と13歳で結婚しています。三女勝姫は権力が確立してきた中、一門対策として秀忠の兄秀康の子忠直との結婚でした。四女初姫は母お江与の姉お初の養女となり養母の継子京極忠高の妻となりました。五女和子は生まれた次の年に家康から朝廷の親王の妻に出来ないかという打診があり、それが実現して後水尾天皇の女御に入内し、中宮となりました。

家格の釣り合う結婚

二代秀忠の正室お江与は秀吉の側室淀君の妹で、秀忠が秀吉の人質だった時代の政略結婚でした。幕府成立後、高い格式と権威を持った徳川家は、娘は大名に嫁がせても息子には大名に力を持たせないため大名の娘を正室に選ばず、内大臣・右大臣家である徳川家と釣り合う五摂家や親王家から正室を選びました。三代家光の正室は家格の釣り合う鷹司家の姫君孝子でした。しかしながら、疎遠な関係のまま別居し、御台所ではなく中丸御方と称され冷遇されました。四代家綱の正室は伏見宮の姫君浅宮顕子でした。婚儀は隠密に行われ、「沙汰仕まじき旨」伝えられました。徳川家の婚儀が政治的に利用されなくなり、正室は形式的に家格の釣り合いで選ばれ、将軍の権威を高める動きとして利用されなくなりました。家光・家綱の正室に子供が生まれなかったこともあり、側室には、身分など関係なく江戸・京の町人の娘も選ばれ、子供を生んでいます。

京の姫君との結婚

家綱の弟綱重（家光の三男）は「おほやけ（明正天皇）の御はからひ」で二条光平の姫君を正室に迎え、五代綱吉（家光の四男）も鷹司教平の姫君信子を正室に迎えました。綱重の子綱豊（のちの家宣）は上意（将軍家綱の命令）により近衛基熙の姫君熙子を正室に迎えました。上意とはいえ、公家の近衛家としては「当家姫君武家に嫁すの事、先祖よりの遺誡の旨これ有り……無念々々」と嘆いています。六代家宣が将軍になった後に近衛基熙は礼法師範として江戸に招かれ、京公家作法を基にした大奥や幕府の儀式の形式が整うことになりました。

初めての公武合体

家宣が亡くなり、七代家継が、４歳で将軍となりました。天英院（家宣正室熙子）と月光院（家宣側室お喜世、家継実母）は幼い将軍を盛り立てるため、家継と天皇の姫宮との婚姻によって権威を付けようと願い出ました。家光から婚姻を政策として政治的に利用していなかった時代から、幕府から積極的に朝廷に働きかけるという婚姻政策の転換となりました。それに対して、霊元法王は「公武合体之儀御機嫌に思し召され候間、御契約有らるべく候」と姫宮八十宮との婚約が決まりました。残念ながら、家継がすぐに亡くなり、初めての内親王降嫁による朝廷と武家の婚姻（公武合体）は実現しませんでした。姫宮八十宮はその後嫁がぬまま、婚約者として一生を終えました。霊元法王の近衛基熙への強い対抗意識と天英院・月光院の強い母心が実現を可能に導いた画期的な婚姻政策でした。

［注］後編は７月に予定されています。

【記録】文・写真：広報部会・佐藤美代子

第92回　江戸東京博物館友の会セミナー（2010/4/24）

「江戸の食べ物～作る・獲る・食べる～」

講師　田中実穂さん（江戸東京博物館学芸員）

江戸東京の生産力

江戸または明治初期の東京でどのような物が食べられていたかを、明治7(1874)年陸軍省の命令により作成された『東京府志料』で見てみます。各地の生産物を事細かに調査したなかに現在の練馬区あたりに田中村というところがあり、そこでは陸稲、麦、大豆、そば、沢庵漬、干し大根、大根、濁酒の生産量が明記されています。

大根・沢庵漬とさつまいも

大根は江戸末期には200種もありましたが、その加工品の沢庵漬は江戸の一大発明でした。そのために開発されたのが練馬大根で上下の太さが同じになるように育てられ、漬かりが均等になるような工夫がなされました。江戸に住む人々はこの沢庵漬を家では作らず1年の必要量を計算して村人に委託、村人は冬に出来たものを馬で運び支払を受けるというシステムだったようです。保存技術の限界などにより漬けものがメインの食卓のため、1年分を作り保存という形でした。天保7(1836)年の『漬物塩嘉言』によると64種の献立のうち4分の1が大根の漬けものですが、なかには梨など果物も含まれています。

また、水はけがよく乾燥している関東ローム層の阿佐ヶ谷、巣鴨、成増など62の村でさつまいもが作られていました。甘藷（かんしょ）と呼ばれていたさつまいもの調理法は、その8年前話題になった『豆腐百珍』になぞらえ作られた『甘藷百珍』に123種類が紹介されています。寛政元(1789)年に読み物として出版され実用的ではないらしいのですが、献立集としては実に参考になります。たとえば75番目の焼き芋などは「熱いわらの中に埋める……」のみですが、「味は下手に手を加えたものなど遠く及ばない…」とのこと。江戸の冬の風物詩としてどこにでもあった焼芋屋の看板は、「八里半」。江戸の書き物に、「甘さ栗より一歩及ばず」というところからの発想のようです。味は川越本場ものなどがよいとされ、すでに産地がブランド化されていたようで、それはそばなどにもみられ「深大寺そば」はその最たるものでしょう。

さつまいもは澱粉として保管されていたらしく、それをベースに蒸し料理、加工品などに使われ「吉野葛より優れている」とまでいわれていた記述があります。現代でよく食べられているてんぷらなど油を使う料理はあまりなかったようです。それは油が高価だったこと、長屋の台所は狭くスペース的に油料理への対応が難しかったことなどによりますが、当時長屋住まいの台所に存在していた調理器具では揚げ物はできないかもしれません。

ちなみに芋というとこの頃はサトイモのことで、ジャガイモもありましたが好まれず飢饉用の食べ物でした。ジャガイモの人気がでてくるのはのちに洋食が広まり始めてからでしょう。トマトもありましたが観賞用で食べ物としては不評でした。

根菜類と魚介類

さて、『東京府志料』からもう一つ貴重な情報が得られます。根菜類の採れない江戸東京の東部からの搬入作物の一例として、宝木塚村（現在の葛飾区四つ木、お花茶屋あたり）では、水持ちのよい土壌を生かして小松菜、枝豆、きゅうりなどを栽培し、収穫後すぐに船で江戸の市場に運べるという利点を活用していたことが記録から伝わってきます。

魚介類については、この頃東京湾で獲れたものとしてシマエビ、コハダ、クロダイ、シラウオ、コチ、アサリ、ノリ、ウナギなどの名があります。

しかし寿司ネタでは玉子が一番高価だったとか。

江戸の食事風景

毎日の食べものとなると結構記録の取りにくいものですが、『南総里見八犬伝』の作者曲亭馬琴による『曲亭馬琴日記』天保5(1834)年の記述からは、1年間を通した食生活をうかがうことができます。

例えば8月4日、納豆、汁、芋、ころばし、白瓜、香物、しかしそこへ到来物が2件（大タナゴ折7つ、大アワビ折数2）もあり、喜んだかと思えば「終日精進の処、鮮魚二軒より到来。甚だめいわく」とか。

8月15日、月見赤豆団子、衣かつぎ芋、枝豆等、特別な日としては8月17日、孫のおさち食初内祝つまりお食い初めの日の献立は、昼飯ですが赤飯、汁、つみ入、冬瓜、はんぺん、つまみな、くわい、麩（ふ）、椎茸、なまりぶし等々。

また8月晦日、下そうじの者（くみとり）がきて「当夏日照りやあぶらむし付着のため大根蒔き直し候へども追々冷気に成候故、苗育ちかね候」とあります。この場合、くみとり業者がそれで野菜（大根）を育て、沢庵作りの契約を結び12月納品の予定でしたが、できかねるとの申し出でした。この年沢庵300本の予定でしたが275本になりました。このようにおおかたの食材（米、味噌など）や、まき、茶などは購入先が固定されていました。

以上、かつての東京がこれだけ豊かな食物を生み出す地力を有していたことや当時の食事風景を資料をもとに紹介させていただきました。

【記録】文：広報部会・松田悠美子
写真：同・佐藤幸彦

第93回 江戸東京博物館友の会セミナー（2010・5・22）

「江戸の弁才船（菱垣廻船、樽廻船など）」

講師　小堀信幸さん（船の科学館・前学芸部長）

弁才船とは

千石船と称した弁才船（べざいせん）は中世末期から瀬戸内海を中心に発達した商船で18世紀にピークを迎え、国内海運の主力として活躍しました。船体は棚板造りで水押（みよし）造りの船首が大きな特徴といえます。帆装は中世以来の伝統的な形式を踏襲して船体中央に大きな長四角の帆を展帆します。近世初期には櫓（ろ）と帆を兼用していました。しかし18世紀中期には帆走専用船にかわっていきました。幕末には洋式船も導入されて、明治政府も積極的に帆船の洋船化を試みますが、建造コストなどでなかなかうまくいかなかったため、明治政府は弁才船の性能はあまりよくないということをいいだします。それが今日でも弁才船は順風でしか走れない、性能のよくない船であるというような記述がのっていますが、実際には弁才船は江戸期において国内海運では大変活躍し、順風、逆風、横風でも帆走できる経済性の高い船であったことを、皆さんに知っていただきたいと思います。

基本的な弁才船の構造

弁才船は3階造りの船で、水押造りの船首に特徴があり、当初上廻りは総矢倉形式で舷外に突き出た上船梁に台を渡し、たてに雨押や筋などの縦通材を組み合わせた垣立（かきだつ）を立て、屋倉板を張っていました。しかし、17世紀後期には総矢倉を舳（へさき）と艫（とも）にわけ総矢倉を居住兼作業区画とし、舳と艫の垣立の間に空船の時に伝馬船を搭載する伝馬込みを設けました。18世紀にはいると、弁才船は上棚の上縁にハギツケといわれる舷側板を垣立の高さまで接ぎ合わせるとともに、船首近くに合羽と呼ばれた水密甲板を設けて耐航性を向上させていきました。

江戸時代の船の役割

江戸時代には普通は陸路を馬で大きなものを運んでいましたが、馬1頭が運べるのは米4俵、およそ120キロくらいです。千石船は1隻で150トン、つまり馬1頭の1250倍運べました。江戸が百万都市になって、大量の物資を運ばなければならないようになったときに、船の役割が江戸の経済を支えていたともいえるほど大きかったのです。

菱垣廻船と樽廻船

菱垣廻船の菱垣というのは船の構造の話ではなく、問屋のトレードマークの話です。元禄期に江戸十組問屋が結成され、その組合の船であるという目印のために垣立に菱垣模様を施した船を菱垣廻船と呼ぶようになりました。ですから、これによって一般の弁才船と区別したと言うこと以外、特別の意味はありません。

十組問屋はなぜ結成されたかというと、難船時に乗員による積み荷の抜き取りなどの問題が発生して荷物の管理ができなくなってきたため、扱う商品別に組合を作って直接船を支配し、不正による買い手の損失をなくすようにしました。

菱垣廻船はさまざまな物資を積み込みますが、荷を運ぶときのバランスを考えると底に重いもの、上に行くに従って軽いものを積みます。酒などの樽は重いので下に積まれるため、海難の際に上の荷物は投棄されても、樽は無事であることが多かったにもかかわらず、投棄された荷物に対する補償は問屋が共同で負う義務がありました。また、生ものである酒は輸送時間の短縮が重要ですが、さまざまな荷を乗せる菱垣廻船は出帆するまでに長い日数を必要としました。これらの不利益、不満が高じて、樽は樽だけで運ぶようになったのが樽廻船の始まりです。

船の競争

菱垣廻船は商売をする上でスピードが大事になってきますが、大坂安治川の河口から浦賀船番所まで、新綿ができたときにいかに速く大坂から江戸まで運べるかという新綿番船の競争が安政年間から毎年行われていました。通常、菱垣廻船の大坂から江戸までの運航日数は12日といわれ、かなり短縮しても6日はかかったといわれていますが、このレースでは最短50時間で着いたという記録があります。大坂―江戸間を約2日、平均して8ノット弱のスピードで航海したことになります。これによっても、港で風待ちなどせず、また追い風だけでなく、横風や逆風などをうまく使ってかなり速く帆走できたことがわかります。また、船磁石を使い、航路を陸から離れて沖乗りができるようになったことも、スピードアップに寄与しました。このようにより早く、大量の荷物を、少ない乗組員で輸送する海運合理化を進めました。

復元された弁才船

現在、復元された弁才船は日本に3隻あります。佐渡の“白山丸”、次に大阪の“浪華丸”、そして2005年に青森で“みちのく丸”という北前船が復元されました。“みちのく丸”は、昨年には青森から函館まで帆走した実績があり、今年6月、9月にもまた陸奥湾の中で帆走する予定です。この帆走では30人くらいが乗り込んで帆を操りながら運行していますが、帆走専用船になった実際の千石積クラスの弁才船では14〜5人で運行していました。

【記録】文：広報部会・中村貞子
写真：同・笹川道央

江戸東京博物館友の会特別観覧会
(2010/4/30)

2010年NHK大河ドラマ特別展「龍馬伝」

4月27日から6月6日までの期間開催の、特別展「龍馬伝」の特別観覧会が、4月30日17時から開催されました。この特別展はこの後、京都、高知、長崎に11月3日まで巡回するものです。

この企画は「2010年NHK大河ドラマ特別展」という肩書を持っていて、大河ドラマと連動して龍馬の遺品や書簡、関連歴史資料を集めて、坂本龍馬の波乱に満ちた生涯をつづろうという主旨です。

最初に市川寛明展示事業係長の解説があり、龍馬の書簡が多く現存して、いろいろな人に多彩な文体で手紙を送っていることなどが語られ、列品の簡単な解説の後に、見学に入りました。たしかに書簡は多く、通覧するのは大変です。今回の図録には全書簡の釈文が分冊で付属しているので、文書に興味がある方は、この釈文を通読した後、展示を見に行くことを、お勧めします。

会場には龍馬の差料、龍馬を斬ったと伝えられる脇差など、興味深い刀数点が出陳されました。今回は図録の説明を補い、刀重点の報告をいたします。

龍馬の刀は寛文頃の土佐の刀工「吉行」で、いわゆる「無反(むぞ)り」の刀です。この刀は大正2(1913)年に釧路市の大火で罹災したと墨書されている由ですが、焼身には見えません。再刃(さいは)（再度焼き入れ）ならば、「再刃」と書くでしょう。土佐の刀工には、吉行の兄、上野守吉国にも、幕末の名工左行秀(さのゆきひで)にも「無反り」の作品があり、土佐で流行したものかも知れません。そして龍馬は「突き」を得意としたとも考えられます。龍馬を斬った男は近年になって見廻組の桂早之助と特定されました。刀は越後守包貞(えちごのかみかねさだ)の脇差です。深い錆(さび)がついています。吉行が三流の郷土刀工なのに対し、包貞は切れ味でも定評がある、延宝頃の大坂の一流工です。

屋内で刀を振り回すと柱や鴨居に切り込んでしまう恐れがあるので、1尺6、7寸の脇差で襲ったことは周到な計画です。一瞬に四太刀斬ったのは小太刀の使い手ならではの早業です。二太刀目の袈裟掛(けさが)けが致命傷であったと思います。袈裟掛けは頸動脈の下部を斬るからです。

その他の刀では、今井信郎所持の脇差は山城守源一法(やましろのかみみなもとのいっぽう)です。一法は近江石堂(いしどう)派の良工で、時代は寛文頃、身幅も広目でこれも小太刀使いのたしなみを感じます。

龍馬がなぜ（逮捕ではなくて）殺害されたかは複雑に考えれば謎が深まります。要するに龍馬のような草莽(そうもう)の志士は、ある時には体制に利用され、利用価値がなくなったり、体制に害をなすようになったり、体制の中で野心のある人の功名の妨げになる時は、消されるのが運命なのではないでしょうか。その意味で勝海舟だって龍馬暗殺を指示した可能性がある、とこれは私見です。

【取材】文・写真：広報部会・佐藤幸彦

江戸博クリップ

「変わった風景」

学芸員　真下祥幸

11年ぶりに江戸東京博物館に戻ってきました。通勤には中央線を利用していますが、4月のある日、お茶の水を出て秋葉原に向かうとき、ふと南側を見ると100mほど先に緑色のドーム屋根を載せた建物が見えました。一瞬何だろうと思いましたが、よく見れば、普段は近くでしか見ることのないニコライ堂ではないですか。線路際にあった旧日立本社ビルが取り壊され、それまで線路からは見えなかったニコライ堂がよく見えるようになっていたのです。旧日立本社ビルが取り壊されたのはもう一年近く前らしいのですが、毎日通うようになるまで気がつきませんでした。跡地にはまた新しいビルが建つ予定とのことで、この景色が見えるのもあとわずかかもしれません。

都内では毎日のようにビルが建ったり、壊されたりして、日々景観は変わっています。両国の周辺も私が勤め始めたころは、西口は今のように綺麗ではなく、江戸博の周りにもホテルや高層ビルなどは少なかったです。何よりも国技館と江戸博は両国の景観を変えた双へきでしょう。もう少しでスカイツリーも完成し、また墨田区周辺は大きな変化を迎えることだと思います。

そうかと思えば、11年前にいつも昼食をとっていた店がまだ健在だと、ちょっとうれしくなります。

近年では、昭和の町並みを写真で展示している展覧会も見受けられますが、今から半世紀以上前の撮影者には「よくぞこの何気ない風景を撮っておいてくれましたね、ありがとう」と思います。また、今の景色を撮れるのは我々だけなので、記録をしておくことの重要性を感じます。

◆このコラムは江戸博の学芸員や講師など館職員の方に執筆をお願いしています。

えど友

サークルだより

◎活動概況

◆**江戸東京を巡る会**：5月15日(土)「大名屋敷跡のロマンスを追う〜港区編1」というテーマで、青山大膳亮下屋敷跡、伊予宇和島藩上屋敷跡、肥後蓮池藩跡、長瀞藩跡、延岡藩跡、長州萩藩下屋敷跡などの史跡をめぐった。参加者26名。

◆**落語と講談を楽しむ会**：4月3日(土)浅草吾妻橋たもとに集合、隅田公園の満開の桜を見物、今戸1丁目・潮江院の「可楽まつり」に参加、初代可楽の墓に参った後九代目三笑亭可楽一門の落語を鑑賞し、浅草界隈を散策した。参加者14名。5月30日(日)江東区総合区民センターで行われた楽修会（落語家・立川談修に指導を受ける素人落語会）の公開高座を鑑賞した。当会メンバーの山内啓巳（太尾亭狸久）さんがトリで落語「抜け雀」を熱演、盛んな拍手を受けていた。参加者14名。

◆**藩史研究会**：4月2日(金)池田敏之さんの世話で、比企地方城跡めぐりバスツアーとして、鉢形城跡、高見城跡、小倉城跡、杉山城跡、菅谷館跡をめぐった。参加者26名。4月9日(金)遠藤陽子さんが福井藩に関し、その前史として福井藩成立までの数々のドラマ、御三家に準ずる大藩として越前松平家が成立してから幕末に至る曲折に富んだ歴史について、研究発表を行った。参加者は23名。5月14日(金)島根県立浜田高校出身の有田欽哉さんが、勝手知ったる浜田藩の歴史について研究発表を行った。司馬遼太郎の「浜田藩追懐の文」が紹介されたほか、竹島の領有をめぐる韓国との江戸時代からの流れも説明され、一同認識を新たにした。参加者は24名。

◆**古文書で『八丈実記』を読む会**：4月8日(木)、4月23日(金)、5月13日(木)、5月28日(金) に例会を開催。参加者は各9、8、8、7名。

◆**神田川を歩き楽しむ会**：4月25日(日)、29日(木・祝)に第6回として、JR「西荻窪」駅から駅通橋へ出て松渓橋まで善福寺川に沿って歩いた。途中、荻窪八幡神社、杉並アニメミュージアム、光明院（荻寺）、荻窪白山神社、中道寺などに寄り参拝・見学を行った。参加者は各39、39名。5月27日(木)、30日(日)に第7回として、JR「荻窪」駅から大田黒公園、角川庭園を見学したあと松渓橋へ出て、成園橋まで善福寺川に沿って歩いた。途中、田端神社、尾崎熊野神社、須賀神社、成宗五色弁財天、宝昌寺、児童交通公園などに寄り参拝・見学を行った。参加者は各42、35名。

◆**「江戸名所図会」輪読会**：5月24日(月)初会合を開き、世話人より主旨を説明し、活動のやり方について打合せを行った。参加者は16名。

❖　❖　❖　❖

●**各サークルとも引き続きメンバーを募集**しています。奮ってご参加ください。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名をご記入の上、友の会事務局へお申込みください。また**新しいサークルの立ち上げ**希望の方は友の会事務局へお問い合わせください。

申込・問合せ先　130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局　Tel.03-3626-9910

会議・会合日誌

2010／4〜2010／5

◆**役員会**

4月8日(木)17時開催。21年度収支決算報告・22年度予算案の確認、監査報告、総会の進行・記念講演のテーマ確認、10周年記念事業計画の進行状況の報告を行った。出席者13名。

5月13日(木)17時開催。5月末の総会の進行・役割・会員の返信状況等の確認、10周年記念事業計画の進行状況の確認を行った。出席者13名。

◆**事業部会**

4月1日(木)17時開催。3月事業報告、今後の事業計画確認。出席者18名。

5月6日(木)17時開催。4月事業報告と今後の事業計画・「えど友発表会」・10周年記念事業の進捗・総会での役割等の確認を行った。出席者19名。

◆**広報部会**

4月16日(金)14時開催。『えど友』55号の校正と次号の方針の確認、「会員が選ぶ東京新百景」企画の応募状況を確認した。出席者13名。

5月21日(金)14時開催。『えど友』56号の内容について確認。「会員が選ぶ東京新百景」企画の進捗報告、また総会担当を確認した。出席者13名。

◆**総務部会**

4月21日(水)13時開催。『えど友』55号の発送業務、次号の日程確認、総会の進行・役割分担等を話し合った。出席者17名。

5月19日(水)13時開催。記念事業担当作業、次号の日程確認、総会準備等を行った。出席者15名。

◆**文政町方書上翻刻 プロジェクト**

4月1日(木)、15日(木)、5月6日(木)、20日(木) A、Bグループとも例会開催。出席者は（A）各10名、10名、9名、10名、（B）各10名、10名、9名、10名。

楽しもう！　友の会創立10周年記念事業

第１弾！ 古文書に親しむ特別講演会

友の会では、古文書に親しみ江戸の世情に関する理解を深めることを目的に平成14年1月「古文書講座」を開設しました。講座発足以来、会員各位の熱意により年々受講者も増加し、本年度は、入門、初級、中級の3講座ともそれぞれ午前と午後に設け、延べ400人近い参加者となりました。また、この講座を契機として「古文書で八丈実記を読む会」という自主サークルが生まれ、さらにこのサークルを母体に江戸博との共同事業として「文政町方書上翻刻プロジェクト」が発足、現在進行中です。

今回10周年記念事業として、同プロジェクトで学術面のご指導をいただいている高山慶子専門研究員と古文書講座開設当初から長く講師を務めていただいた小宮山敏和先生にご講演いただくこととしました。古文書により一層親しんでいただく特別講演会です。現在古文書講座を受けている方もいない方も多くの皆さんの参加をお待ちしています。

・開催日時：8月18日(水)
　　13：00〜16：30
・申込締切：8月5日(木)必着
・会場：江戸東京博物館・1階ホール
・定員：200名　同伴者可（はがきに氏名連記）
・参加費：**会員、同伴者とも無料**
・申込方法：通常の催事と同様（12ページ参照）

［講演1］江戸の歴史と町方書上

◆江戸の町人地は、寛永期(1624〜1644)頃は300ほどの町で構成されましたが、18世紀中頃には1600余町となりました。「町方書上」は、文政8〜11(1825〜28)年にかけて、徳川幕府が町の由来や現況などを名主たちに報告させた調査書です。拡大を遂げた江戸を構成する町々には、それぞれにいろいろな歴史がありますが、「町方書上」はその多様な歴史を伝える貴重な史料です。「町方書上」をはじめとする古文書を通して、江戸の町の歴史について考えます。

○講師：髙山慶子(たかやま・けいこ)さん
東京都江戸東京博物館専門研究員。著書に『江戸深川猟師町の成立と展開』(名著刊行会、2007年)、編集担当に『大伝馬町名主の馬込勘解由』(東京都江戸東京博物館調査報告書第21集、2009年）がある。

［講演2］江戸城の危機管理
―将軍不在時の江戸・江戸城

◆友の会古文書講座では、古文書解読を通じ楽しく江戸時代の理解を深めました。今回は、講座でひもといた内容を振り返り、中級講座で取り上げた将軍が日光社参に出かけている時の江戸の様相について、改めて概観してみたいと思います。その上で、そもそも江戸時代において、将軍が江戸や江戸城に居ない時、江戸城が非常体制になっている（なると予想される）時に江戸幕府はどのような危機管理体制を敷いていたのか、特に江戸城の留守体制を取り上げたいと思います。また、危機管理体制の変化から、幕府における譜代大名や旗本などの存在意義についても言及できればと考えています。

○講師：小宮山敏和（こみやま・としかず）さん
国立公文書館勤務。学習院大学大学院博士後期課程終了。史学博士。東京大学史料編纂所、徳川林政史研究所などで研究。

第２弾！ 会員限定オリジナル 江戸風模様のバッグ＆風呂敷を全員にお届け！

10周年記念として、史跡めぐりや歴史セミナー等で持ち歩くのに便利なA4ノートが入るサイズのバッグと、小物を包むのに使いやすい小さな風呂敷をセットで、会員全員にお届けします。老若男女・季節を問わない小粋な江戸風模様で、着物姿にも合うデザインです。会報『えど友』に同封され8月末ごろにお手元に配送される予定です。今後の皆様の活動のお供に、ぜひご活用ください。

第３弾！ 川面から見る江戸東京（船でめぐる小名木川・日本橋川・神田川）

詳細12ページ参照

第５弾！ 会員が選ぶ東京新百景、締切り迫る

作品の締切りがいよいよ迫ってまいりましたが、応募のご準備は進んでいますか？　2月末に配布しました「作品募集チラシ」から、早や4カ月が経過し、残るところ**締切り（7月末）まで1カ月を残すのみ**となりました。とっくに作品を仕上げ応募された方、各地の写真を撮りため、これから作品にされる方、あるいは締切りまでフルに使って作品を仕上げる予定の方、とさまざまだろうと推察致します。以下は現時点での今後の予定です（変更することもあります）。どうか**奮ってご応募ください**。募集要項の詳細については、すでに配布のチラシ、または「友の会ホームページ」をご覧ください（http://www.edo-tomo.jp/）。

●1次審査…9月24日(金)、25日(土)午後、応募作品から入選100点を選ぶ。“会員が選ぶ”というタイトル通り、審査委員を会員の方々より公募いたします。詳しくは同封のチラシをご覧のうえ、ご応募ください。

●2次審査…9月29日(水)午後、入選100点から入賞10点を選ぶ。審査委員は江戸博都市歴史研究室長・小澤弘教授ほか江戸博および友の会関係者（10名前後）。

●入賞賞品…金賞・1点（図書カード1万円）、銀賞・3点（図書カード5千円）銅賞・5点（図書カード3千円）、両国駅長賞（図書カード5千円）（注）重複受賞あり。

●展覧会…入賞・入選作品100点を額に入れ展示する。
日時：11月2日(火)～7日(日)
午前10時～午後6時
場所：両国駅3番線連絡通路
初日に簡単なセレモニー、入賞者表彰式の後、開場予定。

●『図録』(A4版、カラー、32頁)…入賞・入選作品全100点を収録する図録の作成を検討中です。ただし、応募作品の数や内容等で作成に至らないと、友の会が判断した場合は作成いたしません。そのような事態になりませんよう**幅広い地域の作品を数多くお寄せくださいますよう、重ねてお願い**致します。

(第4弾、第6弾については次号、次々号でお知らせします)

えど友プラザ

友の会 会員の投稿欄

～新選組を脱走した隊士～ 三浦啓之助

清水昌紘

慶応2（1866）年頃か、西本願寺の新選組屯所から2人の隊士が消えた。その1人は三浦啓之助といった。三浦啓之助は本名を佐久間恪二郎といい、数え年19歳。この青年に興味を持った。以下本名の恪二郎で記す。

嘉永元(1848)年11月11日信州松代の生れ。佐久間象山の次男である。このことが彼の運命を大きく左右することになる。象山の長男が夭折したので恪二郎は長男並に扱われ溺愛された。嘉永5(1852)年に象山が42歳の時、勝海舟の妹(順)と結婚したので、海舟は義理の伯父に当たり、順は義母になった。ところが、象山は吉田松陰事件に連座して入獄、8年後に赦免され国許から江戸に戻ったが、再び、元治元(1864)年3月に幕命で門人、従者、恪二郎を伴って京都へ赴く。恪二郎は17歳になり、父の代理で老中酒井雅楽頭や大坂の勝塾へ行くなどしている。穏やかな性格で、このころは彼にとって幸せな時期であったと思われる。

しかし、状況が一変した。象山がこの年7月11日夕方、尊攘派刺客に襲われ落命した。享年54歳。まさに自宅へ着く直前であった。恪二郎は門人ともども駆けつけたが、既に刺客は逃走したあとでその惨状に声も出ず立ちすくんだままだったという。即刻藩にも届けを出したが、京都藩邸からは家名断絶、知行、家屋召し上げの上、恪二郎は蟄居(ちっきょ)を命じられた。佐久間家は体よく切られたのである。彼は藩の仕打ちに憤りを感じたが如何ともし難く、父の敵討ちのために剣術修行を志し、同月16日父の門弟の紹介で壬生の新選組屯所を訪れ入隊を許可された。このあたりの状況は土方歳三から勝海舟あての書状で明らかである。彼の父は象山、義理とはいえ伯父が海舟である。近藤勇は彼を客員として扱った。海舟は新選組を批判しているが、慶応2(1866)年新選組と会津藩に金子を送っている。7月5日付の日記に「恪二郎が世話になっていることへの挨拶」と書いている。

ところが、当の恪二郎はその後間もなく脱走してしまった。入隊した当初は落ち着いていたようで義母（順）あての書状で近況を伝えている。しかし、どうもこの期間中に粗暴な振る舞いをするようになり、隊内でいざこざを起こしたりして浮いてしまい、とうとう居づらくなったというのが真相だろう。新選組は脱走を黙殺した。その後彼は松本で捕まったが藩自体が混乱していたので釈放された。慶応4(1868)年には薩摩藩の海軍部隊に入り、北越戦争に参加している。生前象山が西郷隆盛と面識があったためか、薩摩藩海軍に海舟の知人、門弟が多くいたからなのか判然としないが、海舟の影響は大である。明治3(1870)年、薩摩藩の斡旋で家名再興が認められ松代に戻る。

明治3年東京に移り同4(1871)年には勝の紹介で慶応義塾に入り福沢諭吉方に寄留。明治6(1873)年2月結婚して司法省に就職。ところが、松代の時もそうであったが暴言、暴力を振るうなど手に負えない勤務状態で明治8(1875)年四国松山へ裁判所判事として左遷。身重の妻を東京へ残しての単身赴任である。この期間それなりの仕事をして昇進したが、明治10(1877)年2月26日松山の料亭で急死した。死因は諸説あり、うなぎの蒲焼による中毒死や病気説などがある。享年29歳。当時酒乱で乱暴者と思われ、やがてその名前も忘れられた彼であるが、本当にそうだったのか彼の深層心理をもっと考えてみたいと思っている。

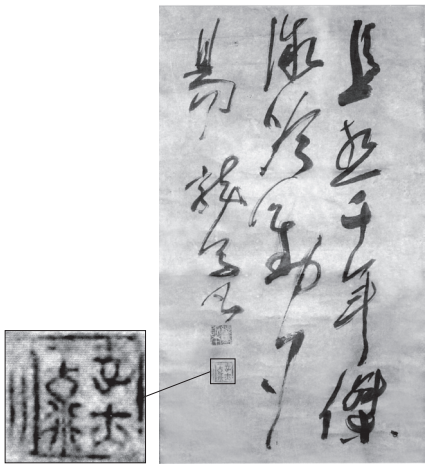
私の秘蔵品一龍馬の書

伊奈源太郎

特別展「龍馬伝」も盛況のうちに閉幕したようですが、私の秘蔵する軸物に下の写真のような龍馬の書があります。戦後京都で求めたものですが、詳しい経緯は忘れました。

内容は「追想千年傑　微吟對夕陽」(センネンノケツヲツイソウシ　カスカニギンジセキヨウニタイス）で「龍馬書」と書いてあります。

長さは2mほどと大きなものですが、私が一番驚いた点は落款(らっかん)に「志士　一流人」と書かれていることでした。ただそれだけのことですが、みなさんにご披露したくなり、写真を送りました。



落語で

江戸散歩…⑮

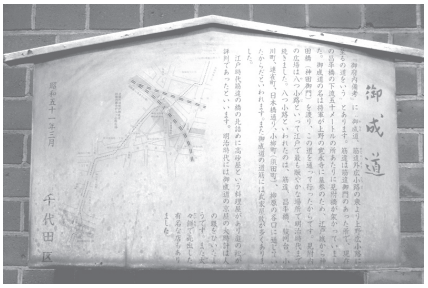
［三方一両損］

竪大工町と白壁町も出ている
神田駅前の町名由来坂

この噺は大岡政談と言われるものの一つです。今回は噺の発端となる柳原付近から、主人公の二人・大工の吉五郎と左官の金太郎が住んでいた竪大工町と白壁町、そして南町奉行所のあった数寄屋橋付近までを歩いてみます。

柳原

神田川に架かる万世橋から歩を進めます。江戸期にはこの橋はなく（明治36年に架橋）、上流側の昌平橋の近くに（昔の交通博物館の外れ）に筋違御門がありました。ですが今ではこの御門の面影を残すものはありません。万世橋を渡ったところから須田町の交差点辺りが、江戸期には“火除御用地”と云われた広場でした。そして江戸切絵図には浅草御門から神田川に面した内側（お城から見て）の土手に沿った道筋に“是ヨリ筋違迄ヲ柳原通リト云”の記載があります。ですから、吉五郎が落とした財布を金太郎が拾ったのはこの辺りだったことになります。筋違御門から須田町、今川橋、室町一丁目、そして日本橋に通じる道は、当時でも主要な通りの一つ、中山道で、今の国道17号線です。須田町の交差点を経て、須田町1丁目の交差点を右に入ります。



▲筋違御門前の「御成道」案内板

竪大工町と白壁町

内神田3丁目の神田多町よりの辺りが、吉五郎が住んでいた竪大工町です。「子別れ」の“熊さん”は、吉原で「俺は神田竪大工町の大工の熊五郎てぇ堅気の職人だぁ…」と言っていますし、「大工調べ」の棟梁“政五郎”もここに住んでいました。落語の中の大工さん達はここの住人です。一方、金太郎が住んでいた町・白壁町は、ＪＲ神田駅の高架下を過ぎた左手の神田鍛冶町1、2丁目の辺りとなります。幕府壁方の棟梁安間源太夫の拝領地で左官職が多く住んでいた職人町でした。

金太郎と吉五郎が殴り合いの大げんかをはじめた時、その止めに入ったのが吉五郎の家主でした。

ここで、家主（大家、家守とも云います）について能書を書かせていただくと…。

▲日本橋魚市場発祥の地跡からの日本橋

江戸の市街（武家地・寺社地を除く）の町家地を管轄し、町人に関わる行政・司法・治安・消防等の市政一般を担当したのは町奉行でした。その町奉行を補佐したのが3人の町年寄で、この3人を通じ江戸惣町を支配していました。そしてこの町年寄の下に町名主が置かれ、この人達はそれぞれ1、2町から数町を受け持っていました。

一方、町の一角に土地や長屋を持つ地主は、これらを管理する人が必要でした。この管理に当たった人が家主です。そして町名主も町の仕事を、この家主に行なわせました。つまり家主は、お役所の仕事と管理人の仕事の両方を受け持っていたことになります。お触れを掲示する、人別（戸籍）を改める、町人同士の紛争を調停するなどを行ない、町内自治の中心的な存在でした。ですから、家主は借家人である店子とは密接な関係にありました。長屋噺の

▲「南町奉行所」跡の碑

枕によく出る「家主と言えば親も同然、店子と言えば子も同然」は、このような関係に裏打ちされていました。

ＪＲ神田駅の高架下を通って日本橋方向に歩きます。今川橋、室町3丁目の交叉点を過ぎて、日本橋に至ります。今の日本橋付近の風景は、多くの人が指摘するがごとく、「これって、何なの」です。そして、橋の上で立ち止まると、川からの臭いと車の排気臭が鼻を突きます。当時、物資運送に重要な地位を占めていた日本橋川も、今ではその地位を道路（高速）に奪われ、文字通りの日陰の存在です。中央通りを新橋方向に歩を進めます。そして銀座4丁目の交差点を右折し、晴海通りを日比谷方向に進みます。

南町奉行所

ここを現在の住居表示にすると「千代田区有楽町2－7」。今は“マリオン”（かってここには日本劇場がありました）の北側（有楽町駅寄り）です。当時の数寄屋橋御門を入っての右側となります。“恐れながら”と訴え出た二人に、お奉行様の大岡越前守忠相の経緯調べと粋な名裁きは、ここで行なわれました。

今回の道筋は、花のお江戸の中心地帯です。ですから、友の会の見学会も数多く行なわれている場所です。会員の諸兄諸姉には、度々この道筋を散歩されていることと思います。

散歩には良い季節です。ブラブラ歩きでも喉が渇いてきました。近くのライオンのビアーホールに入って“シュタイン・ヘーガー”をグッと飲みますか。「でも、飲み過ぎにはご注意を」ですって、「なァ～に、多かぁ飲まねえ。たった一杯」。

【取材】歩いた人（文・写真）：
広報部会・岡田守弘
イラストを描いた人：同・松原良

催事案内

古文書講座

第１期７月講座の変更お知らせ

すでにご案内したとおり、７月は各講座とも午後Ｐ講座が午前Ａ講座に合同となりますが、会場の都合で**開始時間を10時**(通常10時30分)とし、**10時～12時に変更**します。開催週も通常と変わっておりますのでご注意ください。

入門編：７月14日(第２水曜) 10時～12時　AP合同講義
初級編：７月28日(第４水曜) 10時～12時　AP合同講義
中級編：７月17日(第３土曜) 10時～12時　AP合同講義

９月から第２期を開講

９月から下記日程で開講します。受講は自動継続ではありません。改めてお申し込みください。
申込締切は各講座とも７月30日(金)です。

◆入門編
- 講師：小松賢司さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日:9月8日(水)、10月6日(水)、11月10日(水)

◆初級編
- 講師：田中潤さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日:9月15日(水)、10月20日(水)、11月17日(水)

◆中級編
- 講師：長坂良宏さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日:9月18日(土)、10月9日(土)、11月6日(土)

- 講師：第１期の講師に引き続きご担当いただきます
- 時間：各講座とも
  Ａ講座は10：30～12：30
  Ｐ講座は14：00～16：00
  (注意)Ａ講座かＰ講座かの希望を明記
- 会場：各講座とも江戸博１階会議室または学習室１、２
- 定員：各講座とも80名(会員のみ)
- 参加費：各講座とも全３回1,500円(初回一括払い)

【企画担当責任者】上田太一(事業部会)

えど友研究発表会

●第２回「えど友研究発表会」

◆昨年に続き、今年も会員の皆さんによる研究発表会を開催します。発表者と演題は次のとおりです。
- 大渡眞司さん「輪王寺宮の歴史」
- 鈴木正文さん「江戸の踊り　かっぽれ踊り　伝承を探る」

以上２人の会員が研究の成果を発表されますので、多くの皆さんのご参加・ご聴講を期待します。
- 開催日：８月５日(木)13：30～16：30
- 申込締切：７月27日(火)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階会議室
- 定員：130名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員・同伴者とも無料

【企画担当責任者】野川陽一(事業部会)

友の会セミナー

第95回「徳川家の婚姻政策(後編)」

講師　山本博文さん(東京大学史料編纂所教授・文学博士)

◆将来将軍となる徳川宗家の嫡子の婚姻は、原則として五摂家か親王家でした。しかし、十代将軍家治の嫡子家基が夭逝したことによって、大きく転換していきます。薩摩藩島津家の娘と婚約していた一橋豊千代が、将軍の養君となり、十一代将軍家斉となったのです。この後、島津家は、徳川家と最も近い縁戚関係となり、島津斉彬による将軍継嗣運動なども展開されるようになります。本講演では、2008年NHK大河ドラマ「篤姫」にもふれながら、江戸時代後期の徳川将軍家の婚姻について解説していただきます。

○講師略歴：やまもと・ひろふみ
1957年岡山県津山市生まれ。東京大学文学部国史学科卒業。東京大学文学博士。現在、東京大学史料編纂所教授。専攻は日本近世史。『寛永時代』(吉川弘文館)、『天下人の一級史料』(柏書房)など著書多数。

- 開催日時：７月19日(月・祝)14：00～15：30
- 申込締切：７月13日(火)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】清水昌紘(事業部会)

第96回「謎の浮世絵師・写楽を追う」

講師　内田千鶴子さん(江戸文化研究家)

◆今から215年前の寛政7(1795)年、浮世絵師東洲斎写楽は１年足らずの短い期間に、強烈な役者大首絵を中心に140数種の作品を発表、大反響を呼びましたが、ある日忽然(こつぜん)と姿を消しました。その素性は不明で、写楽は誰それという諸説は50を超えますが、江戸後期の考証家斎藤月岑は「写楽は能役者斉藤十郎兵衛だ」との記述を残しています。この説を実証するため、日本中はもちろん海外にも調査に出かけ、実在した十郎兵衛を突き止め・検証した経緯をお話しいただくとともに、能役者の演技、能面の形容や眼などと役者絵との対比により、写楽作品の実相に迫っていただきます。

○講師略歴：うちだ・ちづこ
1966年、早稲田大学第一法学部卒業。1976年、映画監督内田吐夢の次男有作氏と結婚。1979年、写楽研究を始める。1983年、「歴史と人物」(中央公論社)に「写楽＝能役者説の新史料」を発表。1993年、『写楽・考』(三一書房)を刊行、大反響を呼ぶ。最近の著書に『写楽を追え』(2007年、イーストプレス)など。

- 開催日時：８月28日(土)14：00～15：30
- 申込締切：８月19日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

見学会

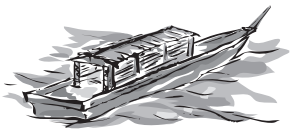
友の会
創立10周年
記念事業
第3弾！

「川面から見る江戸東京」
（船でめぐる小名木川・日本橋川・神田川）

◆江戸の川と掘割は物流と交通の幹線として重要な役割を果たしていました。友の会10周年記念事業の一環として川面から江戸をしのぶツアーを企画しました。コースは、神田和泉橋から隅田川を経て小名木川閘門でUターン、再び隅田川を経て日本橋川を遡上、三崎橋より神田川に入りお茶の水谷を経て和泉橋に戻る2時間半の船旅です。なおコースは変更することがあります。

- 開催日：9月4日（土）（申込はがきに(A)(P)希望を記入）
  午前（A）グループ　9時集合、9時30分出発
  午後（P）グループ　12時集合、12時30分出発
  申し込み状況により調整することがあります。
- 集合場所：神田川和泉橋防災船着場（東京メトロ日比谷線秋葉原駅5番出口地上）
- 申込締切：7月29日（木）必着
- 定員：250名　同伴者は原則1名可（保険手続き等のため申込はがきに氏名・住所・電話番号を記入）
- 参加費：**会員2,000円（会より補助）**、同伴者3,500円
  参加費は前納で、運行不能等を除き原則返還致しません。予定が確実な方の申し込みをお待ちします。参加申込者には改めて振込み先、期限についてご連絡します。

【企画担当責任者】野川陽一



お申込方法

＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込と違い、普通はがきで宛先も友の会事務局と明記ください。お間違いなく！**

◆**普通はがき**に、①催事名（略名可）・開催日、②会員番号、③氏名（同伴者連記）を明記して下記の「友の会事務局」へ。
「往復はがき」の必要はありません。
なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、住所、電話番号も書いてください。
◆締切：各催事の案内をご覧ください。
◆申込は、各催事ごとに会員1人1通。
◆友の会へのご意見・ご要望があればご記入ください。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります**。

会員優待のお知らせ

●**特別展**　好評開催中！

「大昆虫博」

会　期　2010年6月22日（火）～9月5日（日）
休館日：毎週月曜日、ただし7月19日（月・祝）は開館、7月20日（火）は休館
会　員：一般 650円、65歳以上 320円、大・専門生 520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上 520円、大・専門生 830円
＊小学生、中学生、高校生は65歳以上と同じ

次回予告

●**特別展**

「隅田川～江戸が愛した風景～」

会　期　2010年9月22日（水）～11月14日（日）
休館日：毎週月曜日、ただし10月11日（月・祝）は開館、10月12日（火）は休館
会　員：一般 550円、65歳以上 270円、大・専門生 440円
同伴者：一般 880円、65歳以上 440円、大・専門生 700円
＊小学生、中学生、高校生は65歳以上と同じ

企画展のご案内

●**企画展**　好評開催中！

「発掘された日本列島2010」

会　期　2010年6月5日（土）～7月25日（日）
会　場　常設展示室5階　第2企画展示室

●**次回企画展**

「東京復興
―カラーで見る昭和20年代東京の軌跡―」

会　期　2010年8月4日（水）～9月26日（日）
会　場　常設展示室5階　第2企画展示室

＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**水曜日か金曜日（10時～12時、13時～17時）**にお願いいたします。

＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会報＜えど友＞第56号
平成22年7月1日発行（奇数月1日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長兼発行人：松原良（会長）　副編集長：菅沼和男
編集人：佐藤幸彦、岡田守弘、岡本静雄、深尾恵美子、福島信一、松田悠美子、中里弘子、内匠屋京子、笹川道央、栗山佳也、秋尾暢宏、今野君江、鈴木進一、中村貞子、原盛年、藤原理子、佐藤美代子
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1　電話03-3626-9910